

WEB連載 Entertainment・Essay
木村奈保子の音のまにまに
Writer By NAHOKO KIMURA

女性の告発に、なぜ目をつぶるのか

木村奈保子の音のまにまに | 第9号

昨今、話題のニュースで最も臭名高かったのは、美の娘に対する強姦罪で、犯した父親が無罪と判決された事犯。母親を含む5人も有罪している事案で、12歳の娘が夜間父親に強姦されたながらも助けられなかった。無罪となった理由は、裁判所がこの娘の意思はなかったこと、精神的に支配されていた状態だったことを認めると、「拒めないほどの暴力」は受けていないと判断したから。

この判決については、納得できない人々の怒りが爆発しているようだが、それにしても、家庭内で秘められてきた暴力がここまで正々堂々と「加害者の無罪」を判決が下ったことには、驚かされる。感の同業があった、と主訴する父親は、未成年の娘に対し、遺の殺人を犯したという意思はないようだ。何より、罪の判定を下す裁判官までもが、モラルをはずした決着をつけた。

一方、未成年で被害を受け、裁判で負けた娘は、さらに重い未来を背負うことになる。性暴力は、加害者が父親である時点で悪名高々を問うことも、もはや論外と思われる。性的虐待のために娘を主犯としたとしか思えない父親の行動は、他人が行なうのと比較できないほど、罪深い。しかし、親子という関係上、最も訴えにくい状況で、家族全体のダメージや親から得た愛情の気持ちも複雑にからまって、犠牲の道を歩まざるをえないと我輩した娘の被害は計り知れない。

紙片で書いた娘を性処理の道具とした時点で、父親には、償状の量の余裕はなく、「免罪」の烙印を押されるべきだろう。法律の文字を違って、裁判の判決にいたる裁判官の偏見の育成は、必須だ。こうした性暴力については、被害者の感情を理解する、想像力を養う方法として、映画が有効な教科書となるだろう。

ハリウッドアクター、「海の上のピアニスト」主演のティム・ロビンスが初監督した『黒鼠の涙』(1998年、英国)は、美の父親による性的虐待をテーマに、強烈な印象を残した。



『黒鼠の涙』(1998年、英国)

舞台は、田舎の牧歌的な風景の中で、二人の姉弟と夫婦が4人で暮らす、ごく普通の家庭。小太りの落ち着いた体格の父親を中心に、母親が3番目の子供を孕み、いかに幸せそうな暮らしをしている。そこには隠された家族の秘密があった。

ゆるみかかった父親の肉體を、絶めるようにして撮影するシーンが意味深い。妻が母として変わりゆく中で、女性の肉體を魅力に見せるのは、若い娘に似ている。ある日、外から帰った弟が、姉と父親が異性関係にいたことで、妙な違和感を感じる。とうとうどこから物語は展開する。弟は、何かおかしなものを感じて諦め始めるが、姉は何も語らない。弟の疑いの目は、それから姉と父親の様子に集中する。そしてついに、姉が不在のとき、弟が出かける父親の車を盗もうのだが……、家から離れた小屋のなかを覗いた弟は、そこで姉と父親の信じられない光景を目の当たりにする。

本作は、ある物語を役者の魅力や脚本の面白さで見せるといった、ドラマチックな構成ではない。近親相姦のテーマを正面に見据え、ジャーナリスティックな視点で描かれた話題意識の強い演出である。そこを感ぜられるかどうか、映画の見方が問われるはずだ。

小屋の中で営まれる父親と娘のシーンは実に涼やかな。暴力を振るわれて口をふさがれたり、辱めたりするわけではない。求めに応じた娘の欲しみにあふれる表情が静かにクロウズアップされ、なんと切ない。助けを求めるすべがない不条理の姿を写している。いつの間にか父親の誘惑でパターン化され、合図とともにも小屋に行く娘の辛さ、抵抗できない状況は女性なら誰しも察することができるだろう。

小太りのおやじが、なぜ、父親らしい愛嬌で、普通に娘を愛せないのか?なぜ彼女は、生みの親に日常的な性的対象にされなければならないのか?、病院に行ったほうがいい。

彼女は、若い肉體を持つ、というだけで、いかなる罪深きを持つのか?弟や母親に言えない感情、同意の可能性を疑われしるべき無抵抗……本作を見れば、曖昧な女性の行動の中心にある、心の壁、深い絶望感を感じるはずである。仮に、大声を上げて抵抗しない娘を見て、父親との性行為を楽しんでいると解釈できる男性がいたら、病院に行ったほうがいい。

本作を、互いの愛情や肉欲から発した近親相姦物語として解釈する記述も一部ネット上で見かけられたが、それはまったくの勘違いだ。タイトルにあるように、黒鼠を見せる少女の「涙」にあふれた物語で、彼女の涙の叫びが聞かれている。

それ以外にも、名義、ティム・ロビンスがなぜ、こんな衝撃的な題材を初の監督作に選んだのか、監督としての視点、性的被害を受けた者の怒り、嘆き、叫びが伝わるものだった。レイプ、性的虐待を受けた女性の気持ちをごまかすことができる男性は、そうそういるものではない。

かくして、その理由ののちにわかった。ティム・ロビンスもまた、身内から性的虐待を受けていたのだ。幼い頃に受けた「祖父」からの性的虐待をカミングアウトした。なんと、彼の父親もまた、同じ人物(父親の父親=ティムの祖父)から性的虐待を受けていたというのだ。同性からの性虐待は、責任感より軽いとか、重いとか、そんな問題ではない。親が、性のほけ口に娘や息子、孫を対象にするとは、どういうことなのか?

身内から、性的な対象物としてではなく、人間として愛されたという誇りは当然り前の驕慢で、歪んだ性愛のえじきにされたいのは誰とも争むところ。まっとうな愛の環境を作るのは親の責務であり、歪んだ愛しか与えられない親は、もはや子どもを持つ資格はない。

父親による性的虐待といえは、内田魯南原作の『ファーザーファッカー』(1993年、日)は、作家本人の自信、ただ、彼女の場合は、加害者が義父である。懸念ある家庭環境のなか、母親が連れ込んだ養父から精神的支配を受け、ついに性的被害に及ぶ。母親が知っても、娘をさしたすことしか、逃げ道がない。支配的な立派を手にした男は、やり放題なのだ。誰もが耐えない義父のいる環境の中で、未成年であるヒロインは後先を考えず、家から逃げ出す。水着を脱ぎながら、作家としての才能にのどどつくり人生は、力強い。ヒロインは逆境により、成功した女性といえるが、だからといって、この義父が罰を受けなくてはならないだろう……。

『ファーザーファッカー』は、実に良いタイトルだ。「マザーファッカー」は、ママとやってなさい、という侮辱的な意味で男子を指差す表現だ。ママと性的関係を持つというタブーを示しているが、ジョークでも、女子いじめに「マザーファッカー」とは言わない。シャレにならない重さを感じさせるからだろう。

義父から性的虐待される娘といえは、「ミレニウム ドラゴンクローの女」(2009年、スペイン)シリーズのヒロイン、リズベットも同じ経験の持ち主。本作はレイプをテーマとする作品ではないが、強烈な個性の探偵員、リズベットの正しい立ち振る舞い、ママとの懸念あるDV環境と、後見人による性的虐待とつながる。そうしる男の探偵シーンには、残酷なまでに悲愴のないやり方で、痛快そのもの。このタブーがヒロイン像には、多くの女性の心が救われた。

もちろん親でなくとも、女性をレイプする男は、「免罪」と言っても言い過ぎではない。ただ、疑いが明確に出せない場合、女性の主張だけでは信じてもらえず、女性に落ち度はないのかという男性の意見が加えられた措置、裁判があるため、訴えることと訴訟しなくては、セカンドレイプと呼ばれる状況を、映画は何度も描いてきた。

1970年代は、アメリカでレイプが社会問題化していた。そんな中、マーゴ・ヘミングウェイ主演の『リップスティック』(1976、米)はレイプの裁判シーンを中心とする映画で、大ヒットした。一見まじめな音楽教師が、主人公のモデルをレイプするも、巧みな弁論術で無罪になる展開。レイプ裁判という戦場は、まさに男のものと思えるのか、やがて、この教師から、なんと未成年の妹までレイプされたことから、主人公は正義を失う。狩猟用の散弾銃をかまえて、ズドドド、と撃ちまくるシーンはかなりの迫力で、スーパードール、マーゴのこれでもかという撃ち方を驚かすものがあり、女性の気持ちに寄り添った。ちまちま探る裁判官もかたくなにいらぬ、くそらえ、という命がけの怒りが伝わる映画らしい映画である。

その後も日本でも、ジェンダーをテーマにした作家、落合恵子がレイプ小説を書いたものが映画化された。落合恵子は、田嶋陽子や上野千鶴子といったフェミニズム闘志の先人であり、自らオナーとなるクローンハウスでは、幼少の頃から男女差別の意識をなくそうと考えた児童書を描いた、勝金入り。この落合恵子原作の映画『ザ・レイプ』(1982年、日)では、熟見知りの男に突然レイプされ、「合意だった」と断るに誘われたことから、レイプ裁判の罪に繋がっていく主人公の苦悶が描かれる。裁判に立ち向かう中で、取り戻すやり方は、さらなる精神的レイプになる。やがて彼女をサポートする恋人とさえ、断絶しそふになり、二人の関係も壊れつつある。それでも、ヒロインは立ち向かうのだが……、日本で社会派のレイプ映画、映画で女子の力と、という方向にはいかなかったが、B級路線に寄り添ったような状態でも公開され、田中裕子の魅力もあって話題となった。

一方、ジョディ・フォスター主演の映画『黒鼠の涙』(1988年、米)は、酒を飲め、マリファナを吸っていたハズパット・ロビンが、ピンボール台の上で見知らぬ3人の男たちにレイプされ、女性弁護士とともに裁判で戦う物語。

女性が嫌がるとき男たちは、いつも「合意」と言えはすむと思っている、むらむらとどきて、強引に迫り、無理やり行なっても、「合意」と思いたいのが男性の心理だろう。しかも、女はだらしなく、遊んでいるようなタイプである。しかし日本と違い、アメリカではこんなさきだらけの、歴史的状況で生きる女性だからこそ助けようとする。

道端にいた女⇒「男にだらしなく、あなたにもききがあったのではないのか?」こうした偏見を突破しようとする女性たちがスクラムを組む。エリート弁護士女性が、弱い立場の女性を助けるべきであること本作では、強く訴えるのだ。エネルギーのある正義感を持つ弁護士女性のクリュークス(「トップガン」のヒロイン役)は、実際にレイプされた経験があった。

それにしても、自分がレイプしたことがあるわけでもないのに、なぜ男性被害者は、被害女性にセカンドレイプのような感傷をさせるのだろうか?なぜ、加害者より被害者に対して、攻めるような姿勢になるのだろうか?視覚に頼らず、一般的にも、レイプは、被害者に対する罵詈雑言も少なくないのはなぜなのだろうか?

いずれにしても、大きな抵抗を見せない被害者については、『黒鼠の涙』にあるように、性的虐待が常習性のある行為となれば、そこに黙って身を置くのは適合する自分を作り、なんとか生き残るための手段を見つける行為である。決して黙って受け入れた状況ではないことを知るべきだ。

最後に、男が男をレイプする『スリーパーズ』(1996、米)は、少年院でレイプされた少年たちが成長し、検閲やジャーナリストになってから、完全逆襲に向かう物語。男たちが、レイプの怒りを体感するとしたら、むしろ男の被害者状態を見るべきかもしれない。舞台が少年院だけあって、レイプシーンの恐ろしさは十二分に伝わる。

裁判官に限らず、男性一般には、こうした映画による体感教育をしてもらいたい。

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

THE FLUTE お知らせ



THE FLUTE vol.174
THE FLUTE「フルートクラブ」FLUTE CLUB入会・更新は必ずフルート英語一頁
ENTRY 読者・読者
>>> THE FLUTE アンケート一頁へ



Brand guide
ピアノの音と上手に付き合おうと上手になる



クラシック音楽の新たな魅力を体験してみませんか?



フルートデュオ ア・ラ・カルト
楽譜の特殊奏法を解説!



フルートオンライン連載
「フルート」第9回読者プレゼント

THE FLUTE ザ・フルート
今話題の人気記事

お気に入りのフルートに出会う フルートの選び方

第9回 インタビュー編 「野田と絵画」

第9回 インタビュー編 「JAZZ店探訪」第1回

石井春生の歌えて!コンテスタント 第1回 藤本実里

フルートを知らず

PLAY FOR KYOANI 「ひいちゃん」を聴いて

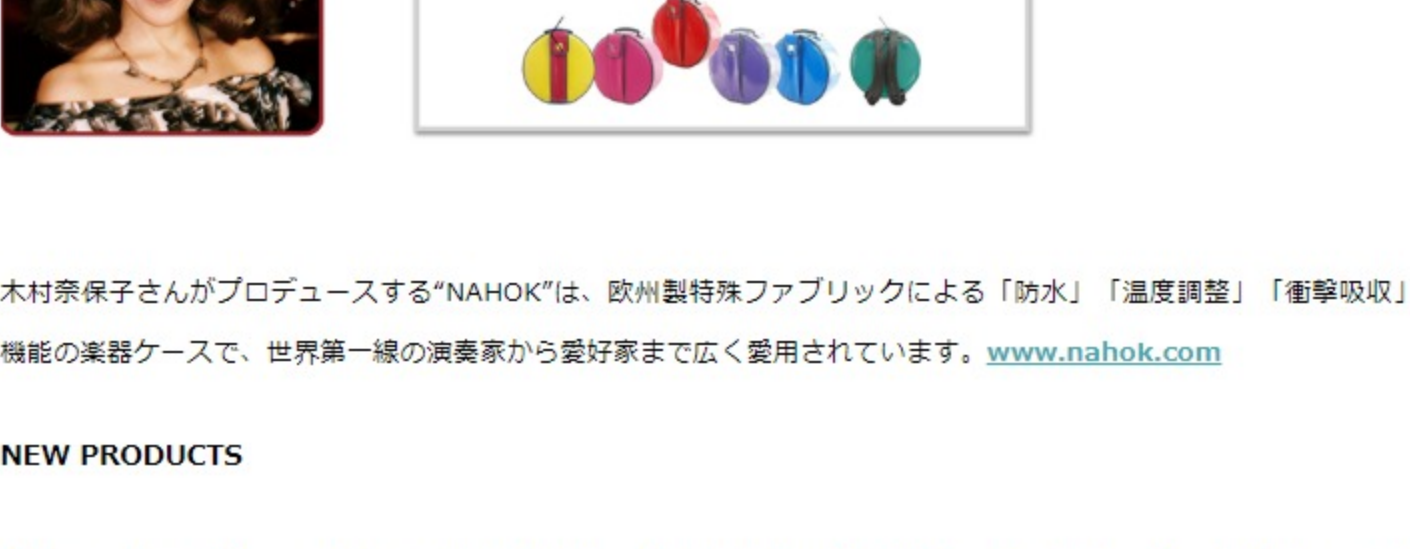
第9回 インタビュー編 「阪上編とサッカー」

WEB限定!フルート編 リンクスのフルートしくじり学

File!01 本編は音楽も大事7月号 リンクスのフルートしくじり学

吹奏楽課題曲 練習ノートダウンロード

NAHOK Information



木村奈保子さんがプロデュースする「NAHOK」は、欧州製特殊フアブリックによる「防水」「透湿調整」「衝撃吸収」機能の楽経ケースで、世界第一級の演奏者から愛好者まで広く愛用されています。www.nahok.com

NEW PRODUCTS

Wケース 2コンパート・リュック「Carito」(カリート) 3色、完成。オーボエ、クラリネット、フルート対応で、近々に発売予定!

Wケースと蓋は同じサイズで2コンパートメントです。ケースと別に小物が入り、本格的な止水フアサナーのリュックの使用です。



製品の特徴: ドイツ製防水生地&透湿調整素材 with 止水フアサナー
生産国: Made in Japan / Fabric from Germany

問合せ&詳細はNAHOK公式サイトへ

>>>BACK NUMBER

第1回 | 平昌オリンピックと音楽 | 木村奈保子の音のまにまに | 第1号

第2回 | MeTooの土壌、日本では? | 木村奈保子の音のまにまに | 第2号

第3回 | 知るべきは音楽の中に――楽譜を通して自分を表現する | 木村奈保子の音のまにまに | 第7号

第4回 | ヒロイン的な女たち | 木村奈保子の音のまにまに | 第5号

第5回 | エリック・クラプトンへサウンドとからむ生きざまの物語～ | 木村奈保子の音のまにまに | 第3号

第6回 | 看板ではなく感性で聴くことから文化が高まる | 木村奈保子の音のまにまに | 第8号

第7回 | 思いあふれて……振り下げて深める音楽愛 | 木村奈保子の音のまにまに | 第10号

第8回 | PRAY FOR KYOANI 「ひいちゃん」を聴いて | 木村奈保子の音のまにまに | 第11号

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……